

今、この日本でキリスト者であって、 科学者であるとはどういうことか？

小久保 正

私は、中部大学生命健康科学部で教員をしております。2003年までは、京都大学工学部におりました。専門は、人工骨や人工関節、がん治療用材料などの医療材料の開発研究です。一方で、キリスト者として公益財団法人日本クリスチャン・アカデミー、関西セミナーハウス活動センターで、様々な対話集会を企画する役も担っております。

私は今日、今、この日本でキリスト者であって、科学者であるとはどういうことか、という題を掲げましたが、これは、私が長い間自問自答してきた課題です。研究活動も終わりに近づいた今、それを総括する時を与えられて幸いに思います。

どのようにしてキリスト者になったか

私が最初にキリスト教に触れたのは、滋賀県の草津においてでした。私は、小学校へ入るとすぐ肋膜炎の診断を受け、休学を余儀なくされました。特効薬の無い時代で、安静と栄養だけが治療手段でした。敗戦直後の故、栄養をとることは困難でした。このまま死ぬかもしれないという不安の中でただ仰臥するのみでした。そんなところへ、日本基督教団草津教会の坂井権一牧師が、長崎で被爆され、療養しておられた永井隆博士の「この子を残して」という本を届けて下さいました。当時父も結核で寝ており、父は、自分も子供を残して死ぬかもしれないと思っていたのでしょう。私にこの本を読んで聞かせてくれました。私はそれを通し、私たちは全地を支配しておられる神様の下にあると知らされました。

一方私は、明日も知れない病の床で、もし癒されることがあるなら、治らない病を治せる医者になりたいと思うようになりました。これが、私がキリスト者であって、科学者であることを志す始まりでした。しかし当然のことながら、人の思いがそのままその延長線上で実現されることはありません。

幸い3年後には病を癒され、学校へ行くことができるようになり、教会の日曜学校にも通うようになりました。それは1年間だけでしたが、この1年間に日曜学校の先生は私に、寝る前に必ずお祈りをする習慣を身につけさせてくれました。これにより

今、この日本でキリスト者であって、科学者であるとはどういうことか？

私は、その後も神様がいないかのごとく生きることができなくなりました。

その後私は、吹田市の千里山に転居し、そこでキリスト教にほとんど触れることなく、中学、高校生活を過ごしました。しかし、いよいよ進路を具体的に絞るべき高校3年を前にして、もう一度神様の前に引き出されることになりました。私は、中学入学の時、大きくなったら医者になって病める人の役に立ちたいと、医師であった祖父に書き送り、祖父から「日蓮上人も幼い時に志しをおこし、それを生涯曲げなかった。君もその志しを曲げるな」という手紙をもらっていました。だから医師になる以外の選択肢を、考えたことはありませんでした。しかし高校3年を前にして、そのように進むことが困難なことに気付かされました。父は、病が癒えて職場に復帰していましたが、なお病気がちであったので、私が卒業まで6年もかかる医学部に進むことは無理なことでした。私は、進むべき方向を見失い、途方に暮れて自分の部屋でうずくまってしまいました。その時、父が私の部屋にそっと入ってきて、次の箇所に赤線を引いた自分の聖書を置いて出ていきました。

何を食べようか、何を飲もうかと、自分の命のことで思いわずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思いわずらうな。命は食物にまさり、からだは着物にまさるではないか。空の鳥を見るがよい。まくことも、刈ることもせず、倉に取り入れることもしない。それなのに、あなたがたの天の父は彼らを養って下さる。——野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、あなたがたに言うが、栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。きょうは生えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくくださらないはずがあるか。——だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう。一日の苦勞は、その日一日だけで十分である。(マタイによる福音書第6章25-34節)

この言葉に触れ私は、今まで祈ってきた神様が、ただ天に坐しておられるのではなく、私に寄り添い、すべての苦難をしっかりと覚えていて下さる方であることを知らされました。

工学部の応用化学科でも、新薬開発ができると分かったので、確実に入学出来そうな大学の応用化学科を選んで、入学試験に備えました。しかし私は、入学試験当日に大腸カタルを患い、座っているのも困難な状態で受験することになりました。その結果入学を許されたのは、応用化学科ではなく、第何志望に書いたかも思い出せない地学科でした。しかし、そこに進む以外に選択肢がありませんでした。新学期が始まる

と、これはえらいところへ来てしまったと思いました。どの授業にも何の意義も感じられませんでした。

これに何の意味があるかを知りたいと思い、自宅の近くの単立千里山キリスト教会の礼拝に通うようになりました。同教会の牧師は、関西学院高等部の部長をしておられた河辺満襲先生で、聖日礼拝を厳守し、祈りを大切にする人でした。私も日曜日には何をにおいても礼拝に出席するようになり、就寝前だけでなく、起床後にも先ず聖書を学び祈るようになりました。

しかし、一向に私の前途は開かれませんでした。大学の図書館でキリスト教関係の本を読み漁りました。内村鑑三、矢内原忠雄、アルバート・シュバイツァー、カール・ヒルティ、ゼーレン・キルケゴールなどの本に心惹かれました。そのうちに、『聴かれざる祈祷』（内村鑑三著、教文館、1958年刊）と題する小さな本に出会いました。その中に、「いかにしてわが天職を知らんか」という私の問題にぴったりの表題の短い文章がありました。そこには、こんなことが書かれていました。

天職を発見するの法は、今日目の義務を忠実に守ることであり、さすれば神はだんだんと我ら各自を、神の定めたまいし天職に導きたまいます、——「すべて汝の手に堪うることは力をつくしてこれをなせ」（伝道之書 9 章 10 節）との聖書の教訓が、これが天職に入るための唯一の途であります、我らは時々刻々と我らの天職に向かって導かれ行く者であります、——私どもはただひたすらに神につかえんとの心を持っておれば足ります、されば神は遅かれ早かれかならず私どもを彼の定めたまいし天職にまで連れ行きたまいます、そこに私どもに大満足を与え、私どもをしてこの世に生れ来りし甲斐のありしことを十分にさとらしたまいます。

この文に触れた私は、個々のことにどんな意味があるかを問わないことにしました。その意味が分からなくても、私の手に堪えることは、すべて心を尽くして行うことにしました。そして、素直に神様の前に頭を垂れ、信仰告白をしました。医療で役立つことを一旦棚上げにすること無しに、神様の前に出ることはできませんでした。大学2年生のクリスマスのことでした。

どのようにして科学者になったか

以後、猛暑の日も、極寒の日も、人が行かない山や谷に奥深く入り、地層を尋ね歩き回り地学の学びに専念しました。それを通し私は、一見ゆるぎなく見える大地も大きなスケールで動いていること、一見変わり映えのしない地層にも、様々な形と色の

今、この日本でキリスト者であって、科学者であるとはどういうことか？

小さな鉱物の変転があることを気付かされ、その巧みさに心打たれました。

ただし、次の進路を決めなければならぬ4年生になっても、前途に何の手掛かりも見出せませんでした。河辺牧師は、アメリカの神学校へ進んで伝道者になることを勧めました。しかし、医療を通して病める人に役立ちたいという志を興された神様が、道を開かれるかどうかをもう少し探ねてみたいと思い、「もう少し待って下さい」と答えました。

その頃父が定年退職を迎えたので、私達は千里山の社宅を出なくてはならなくなりました。私達が次に住む所として与えられたのは、千里山から遠く離れた、京都府のはずれの長岡の、竹藪を切り開いたばかりの人影も疎らな所でした。近くに教会もありませんでした。私達は、エルサレムを追われ、異教の地バビロンへ捕え移されたイスラエルの民のような思いでした。しかし、預言者エレミヤは、故郷への帰還を夢見て浮き足立つ民に向け、そこに留まって生き、その地の平安を祈れと書き送ったのでした。私達も、神様が新しい地で何をなさるかを期待して待ちたいと思いました。

そんな時、たまたま我が家のすぐ近くに移り住んできた人が、当時高槻市にあった京都大学の研究所の田代 仁先生を紹介して下さいました。先生は、ガラス工学の専門家でした。私は、ガラスは地学より新薬に近いのではないかと思い、その先生を訪ね、研究生として置いてもらえないかと頼みました。先生は、簡単なテストをただだけで、来ても良いと言って下さいました。次の年の4月に研究室を訪ねると、先生はいきなり私を助手として採用すると言われました。専門も異なる他大学出身の、しかも大学院も出ていない学生を、いきなり助手として採用することは異例中の異例のことでした。こうして私は、何の備えも無いままに、いきなり科学者の位置に立たされることになりました

キリスト者であって、できの悪い科学者であるとはどういうことか

当然のことながら私は、ガラス工学の研究者なら知っているべき知識をほとんど持ち合わせていませんでした。ガラスを溶かす電気炉の温度計を補正することすらできませんでした。幸いベテランの技術員の方がすべての実験をやってみせてくれたので、見よう見まねで難しい実験も身に付けるようになりました。しかし、彼と同じようにやったつもりでしたが、高速で回る鉄のローラーに左手の人さし指を挟まれ、関節の所からぼろんと落ちそうになった指をかかえて隣の大学病院に連れていかれ、何とかつないでもらったこともありました。

2年たってようやく一つの研究が纏まったので、その成果を東京の学会で発表したら、発表が終ると直ちに、聴衆の中から手が挙がり、同様の研究はすでにアメリカの

学会誌に発表されている、どこが新しいのか、という質問が飛んできて、立ち往生したこともありました。大学に帰って調べてみたら、その学会誌は質問者の企業には航空便で届くのに、私の大学には船便で届くので、未だ届いていないのでした。これにより私は、研究生生活の最初の段階で、1 番以外は評価されない科学の世界の冷徹さを心に刻まれたのでした。

目ぼしい研究成果を挙げるができない年月が何年も続きました。こんな無能な私がここに留まることは、神の名を汚すことになるのではないかと、この務めを辞すべきではないかと、何度も思い悩みました。

当時は南原繁、矢内原忠雄、大塚久雄、隅谷三喜男などの人が、それぞれの専門分野で優れた業績を挙げ、しかも聖書から独自のメッセージを読み取り、多くの人の敬意を集めていました。それらの人にとっては、キリスト者であって、研究者であることの意味は自明のように思われました。しかし私にとっては、キリスト者であって、できの悪い科学者であるとはどういうことかが重大問題でした。

私にはもう一つ課題がありました。就職した直後に田代教授から、「キリスト者は、あらかじめ世界を枠にはめて観るので、大きな仕事をできないのではないかと」問われていました。私が研究業績を挙げなければ、それはキリストの責任に帰せられるのでした。

さんざん悩み抜いたあげく、たどり着いた結論はこうでした。キリストは、何の取り得もない、見栄えのしない者であっても、その人に伴い、恥をも共に負い給う。価値は、私が業績によって獲得するものではなく、神様から与えられるものである。だからその意味が分からなくても、神が退去命令を出されるまでは、そこに留まって生きることを許されている。

科学者としての根の営み

与えられた研究テーマは、ガラスの中にナノメートルサイズの特殊な結晶を析出させて、壁掛けテレビに使えるガラス板を作ることでした。当時壁掛けテレビを作る方式としては現在実用化されている液晶方式の他にも、様々な方式が研究されていました。私達が選んだ方式では、アメリカのガラス会社が先行しており、私の役割は、それに追いつき、追い越すことでした。この課題を解決するためには、ガラスに止まらず固体材料の科学を広く学び、その上に立って独自の発想を展開することが求められました。

幸い、研究所の研究室には、学生が卒業研究と大学院の研究のために少数来るだけでしたので、彼らと一緒にアメリカや英国で用いられている標準的な教科書を丁寧に

今、この日本でキリスト者であって、科学者であるとはどういうことか？

学ぶ時間を与えられました。就職3年目からは、大学院修士課程の学生の指導を任せられたので、彼らより一歩先を行くことが求められました。私自身は、ほとんど毎日、田代教授と研究について議論する時を与えられました。田代教授は、論理の厳密性さと発想の大胆さを重んじられました。私はこの先生から始終、「何故ですか、何故ですか」と問われながら歩みました。先生からは、特許申請書や、科学研究費申請書、英文論文の書き方なども厳しく指導されました。しばしば私の原稿は跡を留めぬほどに修正されました。

一方私が30歳になる1970年頃から、いわゆる大学紛争が世界的に巻き起こりました。学生が大学の在り方に対し、全面的に異議申し立てを行った運動でした。その主張の焦点は、学問を一部の資本家の利益に資するものではなく、一般民衆に仕えるものとせよという点にありました。私が属していた研究所でも、大学院生と助手が教授会に対し、繰り返し団体交渉を要求しました。私と田代教授は、この問題についても繰り返し語り合いました。これは、私がキリスト者として大学の場において研究するとはどういうことかを、改めて問う機会となりました。

この間に私は、30歳で工学博士の学位を得、34歳で助教授に任じられました。しかし、壁掛けテレビ実用化の見通しは一向に立ちませんでした。しかも私には、当時普及していたブラウン管のテレビに代えて、壁掛けテレビを普及させることの意義を理解できませんでした。

キリスト者としての根の営み

長岡に転居後しばらくして私は、自宅に近い高槻の教会に出席するようになりました。たまたま広島の小さな教会からその教会に転会してきた青年が、万国博覧会にキリスト教館を出すことに疑問を感じ、このことを教会でしっかり議論するように求めました。しかし教会はこれを取り上げなかったため、彼は失意の中に釜ヶ崎へ去って行きました。私は、これに深い痛みを覚えました。同時に私は、教会がこの世の人々の間に置かれているとはどういうことかを深く考えてこなかったことを恥じ、これを真剣に系統的に学んでみたいと思うようになりました。

そこで関西学院大学神学部と大学院神学研究科のカリキュラムとそこで使われている参考書を教えてもらい、それらを毎日少しずつ10年かけて学ぶことにしました。教会の伝道師の鈴木重正先生には新約聖書ギリシャ語の手ほどきをして頂きました。NTD新約聖書註解や後に刊行されるようになったATD旧約聖書註解、ヨーロッパ、アメリカ、アジア、日本のキリスト教史などを丁寧に学びました。聖書神学や、組織神学、牧会学も書物から学びました。しかしこうした学びは、神学の世界で何が議論さ

れているかを理解するには役立ちましたが、私の進むべき方向を指し示すことにはなりませんでした。

こうした学びの中で私は、無教会の独立伝道者、高橋三郎先生の「絶望と希望」と題する小さな本に出会いました。それがきっかけで高橋三郎先生が主催する夏と、新年の聖書講習会に参加し、毎月発行しておられた「十字架の言」誌を購読するようになりました。そこには、毎月聖書講義と共に、キリスト者は混迷する社会の問題に対し、聖書からどのように指針を読み取っていくかが書かれていました。私は、毎月それが届くのを待ち構え、1ヶ月間それを鞆に入れて持ち歩き、折に触れて学びなおしました。高橋先生の聖書講習会を通し、犬養光博、伊藤邦幸、澤 正彦などの人とも出会いました。犬養先生は、同志社大学神学部を出た後、筑豊の閉山炭鉱に住み込んで、その地の人達が直面する問題と向かい合いながら、「月刊福吉」という個人誌を発行しておられました。伊藤邦幸先生は、京都大学大学院でキリスト教学を修めた後、京都大学医学部に学び、ネーパルのオカルドゥンガで医療活動に当たり、その地の人々の中でキリスト者として生きるとはどういうことかを発信しておられました。澤 正彦先生は、東京大学法学部を出た後、東京神学大学と韓国の神学大学の大学院で学び、韓国に留まってその地の人々と問題を共有しながら、キリスト者として生きるとはどういうことかを発信しておられました。彼らの報告は、いつも汝はどこに立つかを私に問うていました。

そうこうしているうちに、父が脳梗塞で倒れ、寝たきりとなり、四六時中介護を必要とするようになりました。当時は未だ介護保険制度も整っていない時でしたから、母と私、それにすでに別に家庭を持っていた弟と妹も全力を尽くして自宅療養を支えなければなりませんでした。そんな生活の中で、私は「十字架の言」を購読していた仲間と同人雑誌「豎琴」を発行し始めました。それは、「十字架の言」誌を通して学んできた聖書の使信への、私達の生活の中からの応答でした。昼夜を分かたぬ介護生活の中で感じたことを書きとめ、送り出しました。

やがて母が介護の中で倒れ、気が付いた時には、大腸がんの末期で、4か月の入院で帰らぬ人となりました。父は、さらに3年を生きて帰らぬ人となりました。この介護の期間は10年間に及びました。私が36歳から46歳にかけての、研究者として充実すべき時でした。多く人は、この年代に海外留学をして経験の幅を広めます。しかし、私は最も近い人の介護を犠牲にしてでもやるに値することが他にあるのか、という問いに納得できる答えを見出すことができませんでした。これは、私にとってのバビロン捕囚でした。しかし、バビロンでしか味わえない多くのことを学び、全身に刻みつけて頂きました。介護を受けるしかない者として生きるとはどういうことか、その人に寄り添うとはどういうことかを、深く味あわせて頂きました。

今、この日本でキリスト者であって、科学者であるとはどういうことか？

突然開かれた医療への道

こうして私の大学での研究生活も18年を数え、いよいよ田代教授も定年を迎えようとしていました。しかし、一向に壁掛けテレビ実現の見通しは立ちませんでした。そんな時、たまたま京都大学医学部整形外科学教室の山室隆夫教授が、大学院生の中村孝志氏と共に、田代教授を訪ねてきました。体内で骨と自然にくっつくガラスの人工骨がアメリカで開発されたので、同じものを作って欲しいという依頼のためでした。早速同じ物を作ってみると、それは大変割れやすいものだとわかりました。もっと強くて、骨と自然にくっつく材料を作ってみようということになりました。こうして病める人の役に立つ仕事をしたいという私の長年の願いは、突然思いがけない方法でかなえられることになりました。

小学校1年生の時、病める人に役立つ人になりたいとの志を興して36年目、内村鑑三の「すべて汝の手に堪うることは力をつくしてこれをなせ、との聖書の教訓が、これが天職に入るための唯一の途であります、我らは時々刻々と我らの天職に向かって導かれ行く者であります」を頼りに歩み初めて23年目でありました。

しかしそれまでに学んだ知識と技術を総動員しても、目標達成は容易ではありませんでした。万策尽きたかと思い始めた頃、ふと大学の地学科で学んだ白くて長い繊維状の鉱物ウォラストナイトを思い出しました。これでガラスを補強すれば、強くて骨と自然にくっつくガラスが得られるかもしれないと思いました。これを試みてみると、案の定人の骨より強くしかも骨と自然にくっつくセラミックスが得られました。これを大学の記者クラブで発表すると、早速新聞、テレビが大きく報道しました。朝日新聞は「虎は死して皮を残すが、人は死んで人工骨を残すか」と皮肉りました。1982年の冬でした。

この人工骨は、私が心ならずも地学科で忍耐して学ぶことが無ければ、またその故を理解し得ず壁掛けテレビの仕事に19年間も従事することがなければ、生まれなかったものでした。その意味で、この人工骨は、神様からの贈り物です。神様は、小さき者の志しを捨て置かれませんでした。しかし、これをそのまま延長線上で実現させることもなさいませんでした。それは、きっと私が自分でこれを成し遂げたと誇らないためです。私が42歳の時でした。

独立した科学者として立たされて

人工骨の研究成果のおかげで、私は田代先生退職後も、同じ研究所に留まることを許されました。47歳で教授として独立した研究室を与えられ、52歳の時には工学部

に招かれ、さらに 2003 年に 63 歳で京都大学を定年退職した後には、中部大学に席を与えられ、今日まで合計 27 年間も教授として研究と教育の責任を負うことを許されました。

最初に研究室を与えられた時には、実験設備がほとんど無く、職員の共同研究者も無く、学生もほとんど来ませんでしたが、工学部では設備が整えられ、職員の共同研究者も与えられ、沢山の学生が研究室に来てくれるようになりました。中部大学に移ってからも、設備や共同研究者に不足を感じることはありませんでした。

共同研究者が増えると、研究テーマの幅を広げることができます。しかしそのために多額の研究費を必要とするようになり、研究費を稼ぐために研究テーマを選ぶようになりがちです。私が工学部で研究室を構えた頃には、高温超電導材料がブームで、これなら容易に研究費を得られそうでした。そこで私も、そこまで研究テーマを広げようとしたことがありました。しかしそのとき保谷硝子（株）研究所長をしていた泉谷徹郎氏が私に一言、「私は、光学ガラスにテーマを定めて、動くことはありませんでした」と言われました。彼は、ルターの著作を丁寧に学ぶキリスト者で、日本のカメラを世界一にした立役者です。私は自分を恥じ、金輪際迷わず与えられた医療材料研究の持ち場を大切にしようと思いました。

幸いなことに私はこの 27 年間欠けることなく、京都大学整形外科学教室と密接な協力関係を維持することを許されました。おかげで私はいつも、臨床医療の現場で必要とされるものを知ることができました。それに対応して材料科学の知見を総動員して医療機器を設計することができました。医師達は直ちに動物を用いてその有効性を調べ、その結果に基づいて医療現場で真に役立つ医療機器を提案してくれました。このように臨床医と密接な関係を有する材料研究のグループは、日本はもとより国際的にも珍しい存在でした。

その結果、私達の発表する研究論文は、ほとんどすべて代表的な国際的学術雑誌に掲載され、国際会議にもしばしば招待されるようになりました。私は、海外留学の経験を持たないので英語講演が苦手で、質問に対する回答で 10⁷ と答えようとして、どう発音してよいかわからず立ち往生したこともありました。しかしいつか、国際会議での講演が 100 回を越え、訪れた国が 23 ヶ国を越えてしまいました。医用セラミックスの国際学会の立ち上げに参加し、自ら国際会議を主催したこともありました。英国の出版社の依頼により、医用セラミックの基礎と応用の全体を纏める本を、世界の代表的な研究者の協力を得て編集し、出版したこともありました。神様が出来の悪い最後の者をも、このようにお用い下さったことを感謝したいと思います。

独立した研究者としての歩みを初めた頃から、私は高槻の教会を離れ、自宅に近い日本基督教団向日町教会の礼拝に出席するようになりました。同教会の岡山孝太郎牧

今、この日本でキリスト者であって、科学者であるとはどういうことか？

師は、ドイツ・ハンブルグ大学のティーリケ教授の下でキリスト教倫理に関する学位論文を完成した人です。同教会では、毎月「信仰と社会問題ゼミナール」と題する会が開かれていました。それを通して、私はキリスト者が社会の問題にいかに向かい合うべきかを深く考える機会を与えられました。その際、カール・バルトとボンヘッファーの著作から多くを学びました。聖日毎の岡山牧師のイエスの十字架に焦点をあてた説教と、深い祈りはいつも大きな励ましでした。一方この頃には、高橋三郎先生が脊椎損傷のため身動きならぬ身となりながら、深い祈りを持って毎月口述筆記により「十字架の言」を送り出しておられました。それは、常に私に歩むべき方向を示し、自らの生活を通して応答するようにと促していました。私がそれへの応答として個人誌の「豎琴」を毎年1回発行し、それをお送りすると、その病床から必ず励ましの電話を下さいました。

これらの先生の祈りに支えられて、私はこの27年間次のような研究と教育の課題と向き合うようになりました。

研究における課題

キリスト者と学問の関係について、矢内原忠雄先生は次のように述べています。

「学問に従事する人はだれでも知っているように、いり乱れた複雑な事象の中から、何が法則であるかを突きとめるために必要なものは、「着想」です。学問的に真と偽を判別する第六感です。この直感のとぎすまされていることが、学者の有力な武器です。この直感によって学者は研究の目標を定め、研究の出発点をつくり、与えられた前提の下に研究の過程を進めます。研究の過程そのものは客観的でなければなりません。研究の着想と目標設定には研究者自身の「人間」が大きな関係を持ちます。芸術あるいは宗教によって「人間」を広くかつ深く養うことが、その人の学問をうるおします。学者の世界観を離れてその人の学問はあり得ないのです。すなわち学問に関する限りにおいても、芸術と宗教は教養の重要な内容をなすものというべきです」(矢内原忠雄による「日々のかて」あぶくま守行編、キリスト教図書出版社)

この言葉を覚えつつ、研究上の課題と向き合いました。

1. 人工骨の実用化

優れた人工骨の開発も、患者さんに届くことが無ければ、何の意味もありません。これが患者さんに届くためには、これを製造、販売する企業が現れなければなりません。しかし、この種の体内に埋め込んで使う医療機器は、実用化までに安全性と有効性を証明する数多くのテストを経て、厚生労働省の製造・販売承認を得なければなり

ません。そのために長い時間と多額の費用を要します。しかもこの種の製品は、体内での使用期間が長くなるにつれ不具合が出て、その責任を問われるリスクが大きくなります。従ってこの種の製品を製造・販売する企業を見つけることは容易ではありません。例えば、40 万個も使われている心臓のペースメーカーも、年間 10 万個も使われる人工関節のポリエチレンも、これらを製造・販売する企業は日本に 1 社もありません。

しかし幸いなことに、私たちの人工骨に対しては、大手のガラス会社の社長長崎準一氏がその商品化を引き受けて下さいました。私達は、その実用化を支援する研究を懸命に進めました。医療機器に経験の無い技術者が集められ、多大の苦勞の末、手探りで製造設備を立ち上げました。いくつかの大学病院が、人への試験的使用に協力してくれました。その結果論文発表から約 8 年後の 1990 年ようやく、私達の人工骨が厚生労働省の承認を受け、健康保険の適用を受け、どこの病院でも使えるようになりました。文部科学省は、この人工骨を、同じ頃開発された青色発光ダイオードと並べて、国立大学が生み出した代表的な社会に役立つ研究成果として宣伝しました。アメリカの代表的なガラス博物館は、この人工骨を、ユニークなガラス製品として展示しました。この人工骨は、国内では 2000 年までに 6 万人もの人に使われました。やがてアメリカやヨーロッパでも使えるようになるものと期待されていました。

しかし、製造企業は 2000 年に突然、経営方針の転換により、これの製造・販売を中止すると発表しました。新しい経営陣は、この事業の継続を好みませんでした。私は、この製品の製造・販売を継承してくれる企業を探しましたが、ついに再びこれが患者さんに届くには至りませんでした。

この経験を経て、この種の製品が生き残って、本来の役割を果たすためには、人の痛みを共感し、それを癒す商品に収益性に勝る価値を見出し、それを患者さんに届けることを自分の務めと受け止める経営者と、その経営者の選択を支持する社会的環境が育たなければならないと、痛切に思われました。

2. 動物実験無しで医療材料を開発する擬似体液の提案

人工関節の分野では、術後 10 年もすると固定が緩み取り出さなくてはならない例があります。金属製の人工関節が周囲の骨と結合しないことが大きな原因でした。様々な人工材料を兎の骨に埋入し、しばらくして取り出し、くっ付いたかどうか調べる方法により、骨とくっ付く材料を探す研究が行われていました。そのために沢山の兎が犠牲になっていました。

私達が、セラミックスの人工骨と骨の境目を調べてみると、人工骨は体の中でその表面に骨の成分のアパタイトの層を作り、それを介して骨とくっ付くことがわかりま

今、この日本でキリスト者であって、科学者であるとはどういうことか？

した。しかもこのアパタイトの層は、動物の中だけでなく、イオンの種類と濃度を体液に等しくした擬似体液の中でも生成することがわかりました。そこで、動物実験をしなくても、擬似体液の中でアパタイトの層を作る材料を探せば、骨とくっつく材料を見つけることができると、1990年に提案しました。以後、世界中の多くの人がこの擬似体液を、新しい人工骨を探すために使うようになりました。ヨーロッパバイオマテリアル学会はこの意義を認め、1998年にヨーロッパ人以外で初めて私に学会賞を贈ってくれました。2007年には、この擬似体液が国際標準規格に加えられました。2010年には、これを解説した論文が、材料科学の分野で最も多く引用された論文になりました。これにより人工骨の研究のために犠牲になる動物が大幅に減った筈です。野の花と空飛ぶ鳥を大切にされたイエス様に、喜んで頂けるのではないかと思います。

3. 骨と自然にくっつく人工関節の開発

この擬似体液を用いて私自身は、人工関節に使われているチタン金属もその表面にナトリウムイオンを入れてやれば、体内でアパタイトを作って骨と自然にくっつくようになるだろうと予測しました。枚方のイオン工学センターへ行って、最先端の装置を使って高真空、高電圧下でナトリウムをチタン金属表面に叩き込んでもらいました。しかし、この処理には100万円もかかりました。そこで学生に、チタン金属のかげらを苛性ソーダの水溶液に漬けた後、電気炉で少し加熱してもらいました。そうしたら高価な装置を使わなくても、ナトリウムイオンがチタン金属の表面に入り、このチタン板を擬似体液に漬けたら、その上にアパタイトができました。同じチタン板を医学部の学生さんに兎の脛の骨に植え込んでもらったら、それは周囲の骨にしっかりくっ付きました。この処理を人工関節のチタン金属に施せば、人工関節は骨と自然にくっ付き、長い間緩まなくなるだろうと思われました。1994年のことでした。

多くの人々が、大きな研究費を得て高価な研究設備を備えないと、良い研究ができないと言い、大きな研究費を得るために血眼になっています。しかし、高価な装置を入れるとそのために研究をすることになり、立ち止まって考える時間を失いがちです。良い研究成果を得るのに必要なのは、大きな設備ではなく、時流に乗らない着想です。「むさぼるな」は、研究の場においても聞くべき重要な聖書のメッセージです。

世界で初めて骨と自然にくっつく金属が得られたのでした。それもすでに使われているチタン金属を簡単な化学処理と加熱処理に処するだけで得られたのでした。これならすぐに厚生労働省の製造・販売承認が得られ、全世界の人工関節に使われるようになるだろうと思いました。幸いにもこの成果は、発表後間もなく、大手の鉄鋼会社の技術者松下富春氏の目にとまり、早速それを人工関節に実用化するプロジェクトが

立ち上げられ、国の補助金も得て、実用化へのテストが着実に進められました。しかし動物実験に 5 年、患者さんへの試験的使用と評価に 4 年、厚生労働省の製造・販売承認審査に 4 年を要し、これを使った人工関節が実用化されたのは、13 年後の 2007 年のことでした。日本では、これら医療機器の審査基準が整っておらず、経験を積んだ審査員も整っていないためでした。しかも承認後も、年間 10 万ケースも使われる日本の人工関節の中で、私達の人工関節が使われたのは 2012 年までの 5 年間に 1 万ケースにも及びませんでした。実用化研究を立ち上げた企業の医療事業部が、開発研究の途中で別の企業に移管され、新しい企業の経営陣がこの製品にあまり興味を示さず、これが少数の病院にしか行き渡らないためでした。

経営者だけでなく、厚生労働省などの行政官にも、企業の技術者、営業担当者にも、患者の痛みに共感し、それを癒す製品に大きな価値を見出し、それを患者さんに届けることを自分の務めと受け止める人が少ないのです。

日本の人工関節の 90% を供給しているアメリカのセラミックス学会が、2009 年にこの人工関節の基になった研究成果を表彰してくれました。私は、この賞を受けるためバンクーバー空港に降り立った時、タクシー乗り場に次々入ってくる日本製の小型のハイブリッド車を見ながら、この大陸でもいつか日本発の人工関節が使われる日がくるかもしれない、思いました。

4. 骨を作る人工椎体の開発

最近では、小さな孔が沢山開いた人の骨とそっくりのチタン金属にある種の化学処理と加熱処理を施すと、細胞移植をしなくても、筋肉の中でも骨を作るようになることがわかってきました。

今日では、細胞操作によって各種臓器を再生させる研究が盛んです。その中で最も注目されているのが、山中先生の開発した iPS 細胞を用いた研究です。これを用いれどんな臓器でも作れそうだとされています。政府は、この技術を経済成長戦略の中核技術に据えています。しかしこの方法には、危うさがあります。細胞の生命現象には、まだわかっていないことが多くあります。その結果、細胞操作が望まない結果を招くことがあります。がん化はその一つです。そもそも生命現象の特長は、多様性にあります。それを人間に都合の良い方向にだけ規制しようとするのは、自然の摂理に反するのではないのでしょうか。造られた命への畏敬の念を忘れた生命操作は、禍いを招くことを恐れなければなりません。

だから私は、細胞を使わなくても、材料の加工だけでどこまで治療効果を上げることができるかに専念してきました。それが、材料科学の分野で長い間訓練を受けてきた者の務めだと思います。細胞移植をしなくても、簡単な化学処理と加熱処理だけ

今、この日本でキリスト者であって、科学者であるとはどういうことか？

で、筋肉内でも骨を作るチタン金属が得られるようになったことは、様々な可能性を示唆します。

これを人工椎体に使うと、健全な部位から骨を取って移植（自家骨移植）しなくても、人工椎体を周囲の骨に固定することができます。すでに5人の患者さんに試験的に使われて、よい治療効果が得られています。しかし残念ながら、これを実用化して患者さんに届けようとする企業は、未だ現れていません。日本で年間30万個も使われている人工椎体は、すべてアメリカ製で自家骨移植を必要とします。いつの日か、日本発の体にやさしい人工椎体が世界の患者さんに届くことを願っています。

5. 肝臓がんを治療するセラミック微小球の開発

細胞を用いない治療法を発展させたいと思って始めたもう一つの研究に、セラミックス微小球を用いたがん治療法があります。これは、使用直前に原子炉で中性子線を照射して、ベータ線だけを出すようにしたセラミックスの微小球を、カテーテルでがんのところへ送りこみ、がんだけを局部的に放射線照射してがん細胞を死滅させる方法です。この目的のガラス微小球は、すでにアメリカで手術の難しい肝臓がんの治療に使われて、良い効果を挙げていました。私は、日本の患者さんにもこの治療を可能にしたいと思い、アメリカのガラスより性能の高いセラミックスの微小球を作り、その実用化の研究を進めました。この研究では、未だ実用化の目途が立っていない段階から、神戸で精密加工業を営む中小企業の社長さんが共同研究に加わって下さいました。長年、日本キリスト教団神戸栄光教会の聖歌隊の指揮をとってこられた清水泰博さんです。この治療法の実用化のために、一緒に京都大学発第1号のベンチャー企業を立ち上げました。京都大学医学部放射線科の動物実験で、優れた治療効果を確認するところまで行きました。しかし、これの製造・販売を担ってくれる企業を見つけることができませんでした。実用化を断念し、会社を解散せざるをえませんでした。その結果、日本の肝臓がんの患者さんは、今もこの方法による治療を受けることができません。しかし、このようにリスクの多い事業に、終始協力を惜しまなかった企業人に会うことができたことは、まことに幸いなことでした。

6. キリスト者の研究の特色

これらの研究課題と向き合ってきてあらためて、研究生活の最初の段階で田代先生から問われた問い、「キリスト者は、あらかじめ世界を枠にはめて観るので、大きな仕事をできないのではないか」を思い起こしています。思うに、人はどの人も何らかの価値観の下で仕事を選んでいきます。だからその価値観によって仕事の方向が規定されます。それではキリストに価値の基準を置く者は、他に価値の基準を置く者に比

べ、特定の方向の狭い範囲の仕事しかできないでしょうか。事実は逆だと思います。キリストに価値の基準を置く者は、この世の名誉や、繁栄や、他人の価値観に囚われない故に、自由であり、社会や時代の制約を越えることができます。

私が骨とくっ付く人工関節の研究で科学技術振興機構関係の表彰を受けた時、その祝賀パーティの席で、ある人が妻に「先生の発想は、いつも斬新ですね。家ではどう過ごしておられるのですか」と問われ、妻はこう答えたそうです。「主人は、朝毎の祈りの時を大切にしています」。この祈りの時、私は諸々の拘束から自由にされます。

教育における課題

以上のような研究上の課題と向き合う中で私は、この国には乗り越えるべき根本的な課題があると思うようになりました。それは、この国には、自分に委ねられた務めが何であるかに思いをこらし、そこで示される務めを一人でも責任を持って担い抜こうとする人が乏しいことです。多くの人は、与えられた課題を効率良くこなす術にはたけていますが、どこに課題を設定するべきかを問われると、とたんに戸惑い、その責任を回避しようとしています。先の原発事故の際、テレビに出てきた原子力の専門家も、想定外の出来事に出くわし、語るべき言葉を持っていませんでした。もう一つの課題は、この国の人には、造られた命への畏敬の念が希薄であるということです。そこで、私は次のような教育上の課題と向き合うようになりました。

1. 専門教育において

どのような環境においても一人立って責任を負い抜く人として育つためには、まず独自の視点に立って物を視、批判に耐える仕事をできるようにならなければなりません。

だから学生には、まねごとの研究はするなと戒めました。そのためには他人の論文は、基本的なもの以外は読み過ぎないことが大切です。他人の論文に囚われると、重箱の隅をほじくるような発想しか出てきません。垂流の論文は、それ自体意味が無いばかりか、真に価値ある論文を覆い隠す故に、害となります。今日ではあまりに多くの研究論文が次々に発表されるので、若い学生はもう何も研究することが残されていないような印象を受けます。しかし、隣人の困窮にしっかり目を留めるなら、解決を迫られている課題は明らかです。それが見つかれば、それに向けて無駄を排して一直線に進むことが必要です。

しかし研究結果は、常に独りよがりにならないように、分野を越えた多くの人の批判を仰がねばなりません。

今、この日本でキリスト者であって、科学者であるとはどういうことか？

結論は、常に論理的で、単純で、明快であることを要します。

しかもそれは、わかりやすい、印象的な言葉で公表される必要があります。どんな貴重な真理も、他の人に共有されて初めて意味を持ちます。口頭発表は、攻撃だと言われます。正確さより、心に響くことが大切です。退屈な言葉は、聞いている人の貴重な時間を奪います。

得られた結論は、論理的で、簡潔な文章で書かれた形で公表されることも必要です。書かれた論文は防衛だと言われます。結論を導いた根拠が必要、十分に示され、予想される批判にも丁寧に答えた、正確な記述が求められます。公表は、日本語だけでなく、英語でもなされることが望まれます。それにより得られた結論は、地域を越え、時代を越えて人類に共有されることになります。これは、私自身が受けてきた訓練です。

2. 専門基礎教育において

自立した責任を負いうる人を育てる出発点は、専門基礎科目を幅広く学ばせることです。しかし一般に、専門基礎科目の教科書は、知っているべき事項を網羅的に書いてあるので、興味を喚起しません。私はある時から、個別の事項を教科書通り教えるのをやめ、生活の中で抱く疑問から始め、その疑問を解くために、私達の先輩がどんな試みをして、どんな発見をしたか、それで解決しない疑問にさらにどう取り組んだかを順にたどりつつ、現代に至る探究の歴史をひと続きの人間の物語として語り、私達は今なおその探求の途上にあることを示そうとしました。それを通して、科学で真理とされているものは、動かない真理ではなく、人は未だ真理の一部しか知らないことを示そうとしました。

ヒトゲノム計画を先導した科学者フランシス・コリンズは「ゲノムと聖書」（中村昇、中村佐知訳、2008年NTT出版刊）の中で、「人の知恵で知り得ることは、真理の半分だけである」と述べています。

もう一つ専門基礎教育で心がけたことがあります。それは、学生が到達すべき目標を教師が勝手に設定し、学生の達成度がそれに至らないと言って、学生を低く評価しないことです。学生は、それぞれ一つしかない人生を精いっぱい生きています。以前より少し前進したら、それは褒めるに値します。目標は、学生ごとに違っていいのです。神様は、それぞれの学生に別々の役割を委ねておられるのです。

3. 教養教育において

日本の社会では、生命への畏敬の念が極めて希薄です。命の価値を経済効果でしか評価できない社会は、自分の命を危うくします。命への畏敬の念の教育は、科学技術

の専門家だけでなく、経営や、政治に責任ある人にも、広く市民に行われる必要があります。

一方、科学・技術が急速に発展する社会においては、その成果が真に人類の福祉に資するために、常に専門家以外の市民によって批判されなければなりません。さもないと、アクセルだけの車のように暴走します。市民は科学の成果を批判し得る目を養われなければなりません。それによって車は、ハンドルとブレーキを備えることになります。

そこで私は、京都大学に在職していた時から、学部を越えた少数の学生が、はなしあい形式で、命の意味について考える授業を始めました。中部大学に来てからも続けていますから、もう 15 年になります。脳死、臓器移植、遺伝子治療、再生医療、出生前診断、障がい、スピリチュアルケア、終末医療などについて考え合い、生命操作は、本当に人を幸せにするのかを議論します。

そのクラスの後、学生がこんな感想を書いてくれました。

“小久保先生、今回の「科学・技術と人間」からの最大の収穫は、科学技術が内包する倫理問題について考え始める機会を得ることができたことだと僕は考えています。討論を続ける中で、僕は、人間を助けるはずの科学技術が人間社会の殻を突き破って好き勝手な方向へと暴走し、あたかも人類全体を破滅へと突き動かしているような感覚を感じ、そしてまた、人間社会が崩壊する前兆の激しい軋みの音を聴いたような気がして恐怖を覚えました。今後は、科学技術を具体的に自分の目で見つめ、視野を広げながらこの恐怖を回避する道を模索していきたいと考えています。僕は将来、基礎医学の研究に携わりたいと思っています。人体に直接作用する医学の研究では特に、科学技術が人間に対して及ぼしうる力を広い視野で把握することが重要だと思っています。このような身の引き締まる思いを、絶対に必要な機会、そして礎となる貴重な知識を与えてくださったことに対して、心から感謝いたします。ありがとうございました。”（京都大学 1 年生）

“毎回の講義がとても有意義なものであり、生命を学ぶ私にとってとても刺激的な講義でした。生命について考えるということは容易なことではなく、はっきりとした明確な答えを出すことができないことが多く、考え込んでも、やはり答えの出せなかったこともありました。しかし、それはそれでいいのではないかなと思うのです。生命とはそれほど重く深く大切なものなのだから。だからこそ、生命が軽視されている現代の状況がとても悲しいと思います。この講義を受けることで「人間とはどういうものなのか。人間らしいとはどういうことなのか。欲望とは何か」など、何回も考えることができました。”（中部大学 1 年生）

このような学生が、社会の隅々に散って行き、地の塩としての働きをしてくれるこ

今、この日本でキリスト者であって、科学者であるとはどういうことか？

とを願っています。

4. 入学試験において

こんな試みをしながら、現在の状況を変えるためには、大学の入学試験の方法を変えなければならないと思いました。センター試験の成績により 50 万人もの人を 1 列に並べ、それが人間の価値の順位であるかのような錯覚を与え、それで人生のすべてが決まるかのような思いを学生にも親にも抱かせる、今の制度は変えられなければならないと思いました。多くの子供たちは幼稚園の時から、この試験でよい成績を取る技術の習得に励み、どの大学のどの学部に入るかは、その学生の希望や適性によってではなく、センター試験の成績によって決められる、と言われていました。京都大学工学部工業化学科の場合、20% 近くの学生が、専門科目を学び始める 3 年生を前にして、専門を狭く絞られない総合人間学部へ転学部を申し出てきました。

こういう学生を見ながら私は、工業化学科 250 名の中、後期試験で入る 23 名に関しては、センター試験の成績を参考資料に留め、論述試験と口頭試験だけで工業化学に意欲を抱く学生を選ぶようにしたいと提案し、実施に移されました。この制度は 5 年間続きましたが、私が定年退官すると、手間がかかりすぎる、試験が公平性を欠く、この方式で入学した学生は入学後の成績が良くないなどの理由により廃止されました。私は、彼らの 10 年後を見て欲しいと思いました。

最近、京大や東大でも従来の偏差値重視の試験制度を変えねばならないと議論されていると、報道されています。

5. 高校教育において

センター試験で良い成績をとることが、幼稚園から高等学校までの教育の方向を決めてしまっていることのもう一つの弊害は、生徒が一度も、何が大切かをゆっくり考え、悩む機会を与えられないことにあります。その結果、就職して何が大切かを判断しなければならない立場に立たされた時、はたと困り果ててしまいます。そこで判断を放棄し、大勢に無批判に追従する結果となります。人は何のために生きるかに真剣に悩む時が、感受性豊かな高校時代に与えられることが重要です。

そんなことを感じていた時、島根県江津市に、受験のための勉強は一切せず、労働と自然と聖書を重んじ、人は何のために生きるかを考える、少人数の男女共学の全寮生の普通高校を作ろうという呼びかけが、高橋三郎先生を中心とする人達からなされました。私は、早速賛同者の一人に加えてもらいました。キリスト教愛真高校と名付けられた学校が 1988 年に発足しました。生徒は、テレビも携帯電話も無い寮に住み、豊かなしかし時に厳しい自然の中で自分達で食事を作り、掃除をし、洗濯をし、農作

業をしつつ普通高校の教科の学びをします。常に聖書から、人は何のために生きるかを問われながら、真剣にこの問いと向かい合い、結論を急がず、悩むことを大切にします。

私は、この学校を可能な限り応援し、世の価値観に倣わず、独自の価値観に従い責任を担い抜く人達が、この社会の随所に散って行ってってくれることを期待しています。

6. アカデミー運動において

重んずべきは何かの模索は、大学や学校の中だけでなく、広く社会の中で常に行われなければなりません。私達の社会には様々な解決されなければならない問題が山積しており、それを巡って異なる意見が対立し、出口を見出せない状況に陥っています。ここで必要なことは、事態の根源に遡り、あるべき姿を真摯に探究する姿勢です。

キリスト教には、様々な困難な問題に遭遇しながらそれを越える道を模索してきた長い歴史があります。その歴史から学びとった大切なことは、自己を絶対化せず、祈りつつ、真理に目を開かれるのを待ち望む姿勢です。これは私達が直面している様々な問題に対しても大切な姿勢です。クリスチャン・アカデミーの運動は、こうした認識に基づいて、第2次大戦後東西に分かれたドイツにおいて、その対立を越えることを願って対話と祈りの運動として始まり、ついに東西ドイツの統一をもたらしました。この運動は日本でも1960年頃から受け継がれ、労使関係や開発途上国の問題でユニークな実りをもたらしてきました。

私は、この運動に2000年頃から加わり、生命の意味に関する対話集会を企画してきました。生命科学の急速な進展とその医療への応用は、どの生命も等しく重いというこれまで大切にしてきた合意を危うくしています。国は、急速に進展する生命操作技術を経済発展のための魔法の術として位置づけ、集中投資を行っています。その先に何があるかを市民が冷静に観、熟考しておかないと、立っている命の基盤を危うくするでしょう。同アカデミーの関西セミナーハウス活動センターでは、この10年近く臓器移植、脳死、出生前診断、遺伝子操作、終末期医療、認知症、エイズ、障がい、尊厳死、介護などの問題を丁寧に考え合ってきました。毎回、医師、看護師、介護士、牧師、教師、主婦、サラリーマン、学生など様々な立場の人が熱心にこの対話に加わってきました。この対話の実りがそれぞれの持ち場で生かされていくことを願っています。

意見が対立し、出口の見出せないもう一つの重要問題に、原子力発電があります。これに関しては、私に苦い経験があります。30年以上も前、原子力発電所が未だわづかしかなかった頃、私は指導教授から原子力発電所から出る高レベル放射性廃棄物

今、この日本でキリスト者であって、科学者であるとはどういうことか？

を閉じ込め、地下に埋めるためのガラスの研究をするように勧められました。しかし私は、ガラスも長期の間には地下水に溶けるので、この方法で放射性元素を人間の生活圏から長期に亘って隔離することは無理だ、このような研究を行うことは、処理不能な放射性元素を増やし続けることに加担すると思い、この研究に加わることをしませんでした。しかし、私の意図とは関係なく、原子力発電所はその後も増え続け、廃棄物も増え続け、今回の福島事故により、多数の人に放射線被害をもたらすことになってしまいました。私は、被害を受けて苦しんでいる人から、原子力発電がそんなに危険なものであることを知っていたのなら、なぜもっと積極的にこれを中止するように働きかけなかったのか、と責められる思いです。

そこで、遅ればせながら、クリスチャン・アカデミーで2012年秋から、「原子力発電の根本問題と我々の選択」と題する、そのあるべき方向を根源的に探る1泊2日の会を持つことにしました。さまざまな立場の人が北海道や東北からも集まり、熱心に考え合っていました。その記録集が近日中に出版される予定です（注：2013年10月に新教出版社から「原子力発電の根本問題と我々の選択：バベルの塔をあとにして」と題して出版された）。これを通し、より多くの方が、この問題を共有して下さり、次の世代に命豊かな世界を譲り渡せることを願っております。

このような働きを通し、クリスチャン・アカデミーが日本社会の要所、要所に杭を打ち込むことができることを願っています。

おわりに

以上は、今この日本でキリスト者であって、科学者であるとはどういうことか、の問いに対する私の応答です。この日本には、キリスト者であって、〇〇であるとはどういうことかを課題として、黙々と歩んでおられる方が様々な分野に沢山おられます。それぞれに貴重な応答があるに違いありません。

今私は、この講演を閉じるに当たって二人の人を思い起こしています。一人は外山義さんです。東北大学で建築学を専攻し、後にスウェーデンに学び、帰国後東北大学助教授さらに京都大学教授として、日本の高齢者ホームに個人の生活が大切にされる環境を実現しようとして、厚生労働省の制度を変えさせることまでしました。東北大学で宮田光雄先生にキリスト教の指導を受け、その建築の設計思想に高齢者への思いやりが満ちた人でありました。しかし彼は、2002年、52歳で突然心臓マヒのため召されました。彼の弟子たちは、その遺稿集に「魂の器をもとめて」の名を付けました。彼もまた、今、この日本でキリスト者であって、科学者であるとはどういうことかを追い求めて生きた人でした。日本の教会が、彼から学ぶことは多くあった筈で

す。教会が彼を孤軍奮闘させることなく、彼の働きに連なることができれば、彼はどんなに励まされ、教会はそれによりどんなに豊かにされたことでしょう。

もう一人の思い起こす人は、先に述べた高橋三郎先生です。先生は、ドイツ・マンハイム大学での博士論文を「ルターの根本思想とその限界」と題して纏めました。その主張は、「ルターは、信仰のみによって救われると強調したが、なお信仰を救いの条件とする要素を残した。そのため、後の人は、救われるに値する信仰とは何かを巡って泥沼のような議論に陥った。それは、救いのために人の側の条件を一切無効にした主の十字架を空しくするものである」という点にありました。私達の生を意味あるものとするのは、私達の業でも信仰でもなく、主の十字架と復活です。これは、信仰の正当性を巡って対立を深めている日本のキリスト教会が、改めて聞くべき言葉です。

教会は、教義の正当性の議論を越えて、社会の様々な場で召しに応え、御心がなることを願い求めつつ、その実りを神様への捧げものとしつつ、御国の完成を待ち望む人をつなぎ合わせ、問題を共有し、祝福してそれぞれの持ち場に送り出すことが、求められています。それを通して教会は、神の国の姿を映すものとなります。主は私達に先だって、ガリラヤにおられます。

(2013年5月23日(木) 神学部春季学術講演会)